

エチゼンクラゲ



久保田 信

1



田辺湾に初めて出現したエチゼンクラゲの雄

2005年11月3日、瀬戸臨海実験所(白浜町)が創設されて以降のクラゲの珍事が起こった。その年、世間を騒がせた巨大クラゲ「エチゼンクラゲ」が田辺湾に出現したのだ。

普段見慣れぬ大型クラゲとあって、水産関係者が親切に捕獲・保持してくださった。駆け付けてみると、網に囲まれたいけすの中を悠然と泳ぐ、まさにエチゼンクラゲの姿があった。

この個体は傘径が60センチほどでちょっと小ぶり。薄茶色の傘の下に広がる口腕から、さらに濃いこげ茶色の糸状付属器がよく目立つ。これは1匹の長さに達した。生殖巣を顕微鏡で観察したところ、多数の精子を確認でき、成熟した雄であることが分かった。

この珍事は、同年のエチゼンクラゲ出現が特別な状況にあったことを裏付けている。8月に串本で1個体が確認され、県北部でも、複数個体が

底引き網に掛かって漁業被害を出した。網に掛かった個体の中には傘径1メートルに達するものもいた。同じ時期、関門海峡や瀬戸内海でも出現した。

これまでの情報から、エチゼンクラゲの大量発生は、8月に生まれ故郷の中国や韓国の海域から対馬海峡を経由して日本海に入る。9月10月にかけて本州の日本海沿岸を対馬暖流に乗って北上する。場合によっては11月に津軽海峡を抜けて本州太平洋沿岸を南下し、まれだが12月に千葉県沿岸にまで達する。このような北回りからの田辺湾への来訪はほとんどありえないが、今回は瀬戸内海あるいは四国の太平洋沿岸経由で紀伊水道に入ったものと推察される。

常識的に考えると、エチゼンクラゲの田辺湾への来訪は最初で最後と思われるが、自然環境が大きく変化している昨今、そうとも限らない。日本のどこかで定着が起これば一大事になる。

(京都大学准教授)